



山梨県言語聴覚士会

たくましく生きる被災地の皆さんや 福島県士会との交流と絆は、 私たちの宝となりました

副会長 赤池 三紀子



これまでも積極的に東北大震災の被災地に義援金やチャリティーを通して復興支援を行ってきた山梨県言語聴覚士会。震災から2年半が経ち、「いま、私たちに出来る支援」を探しに、次の世代を引き継ぐ若いSTを中心に福島を訪れました。訪問の様子と成果を、副会長の赤池三紀子さんにレポートしていただきました。

「いま、私たちに出来る支援」を探しに、 若いSTを中心に福島を訪れました。

山梨県言語聴覚士会では、東北大震災の被災地に対し、義援金やチャリティーを通して復興支援を行なってきました。2年が経過し、今年度はどのような形で支援が出来るかを模索していたところ、福島では原発の影響が大きく復興も他のようには進んでいないことを知りました。その福島に自分たちが行って見て実際に何が支援出来るかを考えようと会長からの提案があり、ツアー計画が始まりました。メンバーは応募のあった14施設からの25名で、理事から10名と20～30代の15名を選びました。若い世代を優先したのは、次の世代を引き継ぐ彼らにこの経験を長く伝えていただきたいという目的でもありました。



氷雨にびしょ濡れになり、「あの日」の過酷さを実体験した貴重な訪問になりました。

福島県では、原発に近い海岸沿いにある南相馬市といわき市を見せていただきました。いたるところに津波の傷跡が残り、線を引いたようにそこから海側は家の土台しか残っていない光景でした。その残った家の基礎は間取りがはっきり見え、その時まで生活した姿が想像できるようでした。初日の強い雨の中で海岸から3km離れた野球場では、逃げてきた約50名が20mの津波に飲み込まれたバックネット裏に実際に立ちました。旗が掲げてあるポールに上がった2人だけ助かったそうです。野球場の脇の墓碑には高齢者の名前が多くありました。とても寒く冷たい雨でしたが、びしょ濡れになった私たちにはあの日に思いを馳せることが出来た貴重な雨になりました。人々は、大通りの真ん中に工事現場のような100戸近くの仮設住宅に住んでおり、少しでも働くことによって月々の支援金が打ち切られ、その仮設から立ち退かなければならないため、今の南相馬市では震災前より





パチンコ店が繁盛している皮肉な日々だそうです。私たちのバスに同乗して被災口話をくださった男性は70代で、このボランティアをしながら高齢者の集まる地域の場所で新たな出会いを以前にも増して楽しみながら集っているそうです。

被災地の皆さんや福島県言語聴覚士会のSTと結んだ絆は私たちの宝になりました。

2日目のいわき市の久之浜商工会浜風商店街では、確かに力強いおばさんたちがそこにいて、私たちのように訪れるものに笑顔で対応してくれました。先の口話のおじさんといい、ここの商店街の方々といい、津波で家族や住む家を失っても海を憎むことなく浜とともに生きようとする浜風の名前どおりの生き方で、あの日を境に変わってしまった時間を受け入れながらも立ち向かっている姿は脳裏に焼きついています。

このような体験とその夜の福島県言語聴覚士会との交流は私たちの宝物となりました。これから県士会を担っていく若きSTたちが口々に語った感想や想いには、人としての彼らの成長を信じ、さらにSTとして今回の体験を目の前の患者さんに生かすことができる手ごたえを感じました。福島県士会相澤会長から「どんな時も日頃の横のつながりが大切」と教わり、当県のつながりは必ず災害時にも役立つと言ってくださいました。今後はこのツアーをDVD化した報告会やチャリティーなどの県士会活動を通して、被災地の皆様への思いを風化させない取り組みも継続していきます。私たちがツアーから経験した様々な想いを忘れず、改めて人の素晴らしさと敬虔さを再認識したことにより、障害を持つ人々に対しこれまで以上に真摯に向き合い役割を果たしていこうと思います。また、福島県言語聴覚士会との絆を一層大切にし、同時に地域組織として会員同士のつながりを大切に深めていく活動を続けていきます。

